

MINAMI KYUSYU NO JOKAKU

南九州の城郭

第4号 #
南九州城郭談話会報 #
平成9(1997)年2月5日発行 #
#####

顓娃城破却の年次と「顓娃御城取」をめぐって

重永卓爾

ここに言う顓娃城とは、伴姓顓娃氏の本城の謂である。顓娃氏は初代兼政(初名貴重)より、八代久音(童名袈裟寿丸)に至る15世紀前半～16世紀後半の間、薩摩国顓娃郡・揖宿郡(天文初年より)・同郡山川の三万余石を領した。

城跡は旧揖宿・顓娃両郡のほぼ中央に所在し、顓娃町の旧役場跡(現顓娃町立歴史民俗資料館)より北東2.4kmに位置している。

顓娃城破却の年次 島津氏が豊臣秀吉に降伏して間もない天正15(1587)年8月4日、七代顓娃久虎は、各地に転戦軍労の身を癒す暇もなく、突然あえない最後を遂げた。その跡は幼い袈裟寿丸が襲封したが、翌天正16年11月、島津義久は彼を鹿兒島の顓娃仮屋に呼び、直ちに薩摩国谷山郡山田村に転封を命じた。顓娃譜代を父祖にもつ竹内蓮光は、その自記に「天正十六年戊子ノ霜月落去、」また、「顓娃落去之後ハ、五階(顓娃城の)ノ大中ヲ大風ニ吹折御座候ハ見申候、」とある。これに依ると久音の移封は、それと言うよりむしろ改易で、ただちにその居城は破却されたこととなる。それより6年後の文禄3(1594)年5月、坊之津の流謫地に赴く途次、近衛信尹は、「廿日、山川を出て顓ニ着、四里あまり也、左馬介(顓娃久虎)居城とて遥ニ山みえたり、古跡となりたるよし也、」とその荒廃ぶりを日記に止めている。顓娃氏の唐突な改易につ

いては、従来、伊集院忠棟の讒言説が主張されるが、それはともかく、結論を端折って言えば、秀吉に敗戦後の島津氏の政治的、経済的要因がその背景と言えよう。これより先、天正11年段階で義久は、顓娃氏の山川港に対する支配権を限定しており、これは該期イエズス会のバリニャーノと義久との交渉で、鹿兒島にその司祭館建立と、山川港を南蛮貿易基地化するという約束とも関連する。その後、天正15年3月秀吉の軍事介入に義久は敗退し、同年5月降服した。しかし、従来の島津氏分国はほぼ安堵され、同年7月義久は上洛、翌16年10月には鹿兒島に帰館している。この直後に、実は顓娃家の処分が一方的に断行されたわけである。従って、顓娃氏の処置と城郭の破却は、秀吉権力と島津氏との関わりに規定されたものと推測できよう。そして、この時点でも、義久は従来の権力を行使しうることとを領国内に誇示したものとも言える。

如上の措置は、かくのごとく、義久の政治志向(特に外交権にも関連して)と無縁ではなく、その延長線上にやがて山川郷(直轄地)の成立を見るのである。

御城取検者について 島津忠恒側の日記と推測される慶長6(1601)年正月廿六日の条に、「顓娃御城取検者として鹿島右衛門尉・弟子丸右京亮被参候、」とみえる。ここで注目すべきは「御城取」なる役目の存在であろう。

当時の頼娃郡は慶長5年の春、庄内合戦の終結後に伊集院忠真が一万石を宛行われ入部したが、同年の10月末には帖佐に移されている。頼娃の伝承に依ると、忠真の城館（跡は頼娃小学校の東側）や家臣の屋敷割は彼の縄張りと言い、また、この他、ネコ城（御領）も修築したと伝えられる。

このように見てくると、如上の「御城取検者」は、かつての忠真の城館や城砦的施設の検分と頼娃麓の再編の指導に赴いたものと推測される。検者の一人鹿島右衛門尉は、高岡外城の建置にも関わり、また、鹿児島城下の諸士屋敷割奉行をも勤めると言う履歴を持つ。従って、「御城取」とは、島津宗家直属の城の縄張りや検地、さらに軍法などに精通した者の任せられる職掌と言えよう。

島津氏に依る近世的外城（直轄地）の建設整備に、かかる城造りの功者が活躍していた事実は看過されるべきではない。

参考文献

- ・「新編島津氏世録正統系図」義久第九
- ・「島津支系譜図」
- ・島津家本「頼娃・揖宿郡地誌備考」
- ・島津家本「後編旧記雑録」第五十三
- ・近衛信尹「三藐院記」（『史料纂集』）文禄三年
- ・重永鶴翁斎「麓中嫡男二男家屋敷成行之次第」天明七年

事務局便り

募 集 !

◎機関誌『南九州城郭研究』創刊号の原稿募集

1. 論文 400字×50枚程度（図版・註を含む）
2. 研究ノート 400字×20枚程度（図版・註を含む）
3. 史料紹介 400字×5～20枚

◇◇ 第4回見学会・例会報告 ◇◇

犬童球溪の唱歌「旅愁」で名高い人吉市、今回は約670年間球磨地方を支配した相良氏の「人吉城」をテーマとして実施された。

平成8年9月29日（日）、小雨の中、開会。南九州城郭談話会は雨天というジンクスがある。第1回の大口市関白陣から毎回連続小雨模様であるが、不思議に中止するほどの雨はなく、いつの間にか止んでいる程度のものであるのだが……。今回も同様であった。

10時に人吉城内の相良護国神社境内に約50名が集合、開会式のあと早速人吉市教育委員会鶴嶋俊彦氏の案内で中世～近世の人吉城をひと回りするすることになった。

石橋を出て左手西方へ坂道を登る。右手に西の丸と上原城のくびれ部の堀切やら上って中原城と上原城を分かち堀底、南へ進み上原城跡、南隅の一段高いところが主郭、発掘でも中世掘立柱跡、礎石等を確認したとのこと。南東の迫に長大な横堀も確認したという。鶴嶋氏の説明は微に入り細にわたっており、全員目を凝らし、熱心に聞き入っていた。

城戸口を出て奉行屋敷・原城外回り・下原城、そして北へ下り南へ回り、近世人吉城を一周して12時20分に見学会を終了した。

昼食もそこそこに、午後はきっかり1時から、神社参集殿の板間で「肥後国球磨郡の城郭」をテーマに、これまでの調査資料をもとに鶴嶋氏が約2時間の研究発表を行った。午前中の説明にも優る詳しい発表で、該地の中世城郭をひとつひとつ細かく説明された。長年現場で実際調査に携わっておられるだけに、説得力のある力強いものであった。

中世の求心性の弱い群郭式城郭から、総石垣・外柵形虎口の織豊系城郭へと連続で発展していく人吉城の構造の特色が良く理解できた。会の準備から案内・発表など御尽力いただいた鶴嶋氏に感謝して報告としたい。（出口）

加瀬田城合戦について（前編）

栗林 文夫

建武3年(1336)5月6日から6月10日まで、大隅国肝付郡加瀬田城⁽¹⁾(鹿児島県曾於郡輝北町平房字城山)において、島津貞久と肝付兼重・兼隆との間に熾烈な合戦が繰り広げられた。この加瀬田城をめぐる合戦については、文書を中心に比較的多くの文献史料が残されており、『輝北町郷土史』(1966年)や三木靖他編『日本城郭大系第18巻』(新人物往来社、1979年)等にも取り上げられている。小稿では古文書を使用しながら⁽²⁾、合戦の経過・規模、城郭の構造等について、思いつくまま纏めてみたい。

加瀬田城合戦の経過を中心に、関連して肝付兼重の建武3年の動向を年表風にまとめたものが表1である。肝付兼重の悪党的行動は実は建武政権成立直後から既にあり⁽³⁾、これら一連の肝付氏の活動の中から建武3年の加瀬田合戦の意義を考えなければならない。

さて表1から肝付兼重の活動範囲を追ってみると、実に広範囲に及んでいることがわかる。すなわち、1月には日向国富荘・穆佐城、3月大隅国境、4月から5月初頭まで日向王子城、5・6月は大隅加瀬田城、11月には再び国富荘に、12月には日向三俣院へという具合でまさに神出鬼没の観がある。これは肝付兼重が日向三俣院領主職を有し、兄の大隅肝付郡弁済使職の代官をも勤めたことによると思われる⁽⁴⁾。肝付兼重のこのような活動は、

日向国富荘一日向三俣院一大隅肝付郡を結ぶ通路が整備されていて初めて可能であったはずである。また、このことから城郭はそれひとつでは決して存在し得ず、中心の城郭とそれを取り巻く複数の城郭の相互関連の中で考えなければならないことがわかる。肝付兼重のこの後の行動から考えてみて、加瀬田城は肝付氏の防衛ラインのひとつに過ぎなかったといえる。同様に肝付氏ひとりの城郭のみではなく、彼の与党の城郭(池内城・高浮田城・志布志城・新宮城等)も視野に入れておく必要がある。今回は加瀬田城合戦の規模および加瀬田城の構造について述べる

註

- (1) 史料には「加世田城」・「加瀬田城」のふた通りの表記がみられるが、小稿では後者に統一する。
- (2) 中世の合戦について叙述する場合、近世の地誌・編纂物・軍記物等が「文献史料」として使用されることが多いが、これらの史料は同時代の文書史料に比べれば、史料的価値は非常に低い。勿論、史料残存の多寡という理由からこれらの史料に頼らなければならないことは多いが、厳密な史料批判を経た後で使用する必要がある。小島道裕「文献史料による調査」(千田嘉博他『城館調査ハンドブック』新人物往来社、1993年)参照。鹿児島県の場合についての同様の批判は、既に五味克夫氏が行っている(『歴史史料よりみた本県の中世城館跡』『鹿児島県の中世城館跡—中世城館跡調査報告書—』鹿児島県教育委員会、1987年)。
- (3) 南北朝期の肝付氏の動向については、山口隼正『南北朝期九州守護の研究』402～410頁、文献出版、1989年を参照。
- (4) 五味克夫「島津庄日向方三俣院と伴氏」(『鹿児島中世史研究会報』32号、1974年)

表1 建武3年肝付兼重の動向

月 日	内 容
1. 8	肝付兼重・子息金童丸・萩原兼政、数百騎の軍勢を率い日向国富南加納に打ち越し、政所以下を焼き払う(408号)。
1. 10	肝付兼重等日向穆佐城に寄せ来る(408号)。
1. 12	肝付兼重と同の仁図師慈円日向池内城にたてこもる(407号)。
1. 14	肝付兼重と同の仁日向浮田荘預所にたてこもり、高浮田城に押し寄せる。兼重と同の仁浮田荘跡江方預所瓜生野八郎左衛門尉政所に城郭を構えたてこもる(408号)。
1. 29	肝付兼重と党等、日向志布志城に拠る(424号)。
3. 5	足利尊氏、肝付兼重大隅国境に馳せ向かうにつき、大将の下向を待つべきを称寝氏に命ず(440号)。
3. 20	足利尊氏、肝付兼重誅伐のため畠山義頭を遣わす(492号)。
3. 26	足利尊氏、肝付兼重以下城郭を構えるにつき、島津貞久を遣わす(519号)。
4. 19	肝付兼重以下凶徒等日向王子城を攻めるにつき、対治すべき御教書下る(614号)。
5. 6	大将島津貞久、加瀬田城に発向(634号)。加瀬田城大木戸口合戦(648号)。肝付兼重、日向王子城に寄せ来る(614号)。
5. 7	加瀬田城大木戸口合戦(662号)。
5. 23	野崎村懸合戦(634号)。
5. 25	卯の時、莫弥円也等加瀬田城水手を打ち破る(657号)。
5. 27	野上田伊予房、島津貞久より水手夜討ちの恩賞として百引村地頭代官職を宛て行われる(618号)。
6. 10	加瀬田城攻め落ちる(660号)。
11. 21	称寝氏等、肝付兼重・伊藤祐広以下誅伐のため、日向国富荘太田城に掛けつける(787号)。
12. 5	肝付兼重追討のため、国大将畠山義頭日向三俣院に発向する(823号)。
12. 6	肝付氏の与党等下財部院新宮城にたてこもる(917号)。
12. 18	肝付兼重の城郭(日向三俣院)において合戦あり(823号)。

() は『南北朝遺文 九州編』の文書番号を示す

田中城跡

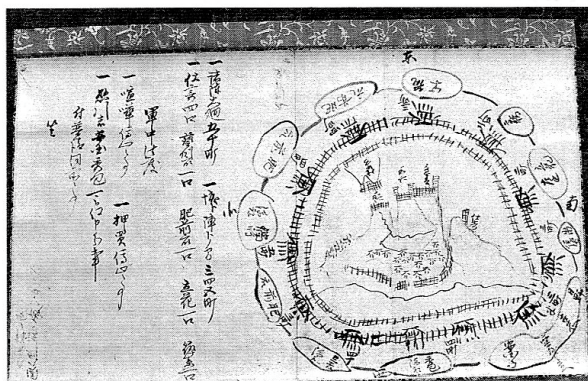
黒田 裕司

田中城跡が所在する熊本県玉名郡三加和町は、熊本県の北部に位置し、北は福岡県八女郡立花町、東は山鹿市・鹿本郡鹿北町、南は玉名郡菊水町、西は玉名郡南関町・福岡県山門郡山川町と接している。

田中城が文献に登場する確実なものは、今のところ廣瀬文書の暦応3(1340)年11月10日の項にある「肥後国鰐城候之由……」であり、落城したのは、柚留木家文書(砥用町)にある安国寺恵瓊が佐々成政に宛てた書簡により、天正15(1587)年12月5日ということがはっきりしているため、田中城は少なくとも約250年は続いたと思われる。

昭和59年、主郭部分の試掘調査が行われ、城に関係していると思われる柱穴などが確認された。この結果を基に、昭和61年4月15日に県指定を受けたのをきっかけとし、国・県からの補助を受けて、同年から本格的調査に取り掛かった。

調査は20年間の予定で始め、昭和61・62年度に主郭の調査を行ってから、今年で11年の調査を終了した。これまでに、主郭のほか主郭周囲の曲輪・空堀・西捨て曲輪、さらに平成元年に山口県立文書館で『迎春・和仁仕寄陣取図』が発見されたことにより、西側斜面に形成された平場というように調査を進めてきた。その結果、主郭では14棟の掘立柱建物跡や土壇など、主郭周囲の曲輪では、ガチガチに固まった焼土が詰まって小鍛冶を思わせる土壇、空堀は現在の地表面から約6m掘り下げてやっと堀底に達する大土木工事であったことなどが確認された。また、地元で監視台跡といわれていた空堀の外側に残る高台からは柵列と堀が確認されて捨て曲輪としての使用が推測され、さらに、平成3年度から行った西側の調査では、連棟式の兵舎を思わせ



迎春・和仁仕寄陣取図

(山口県立文書館所蔵：毛利家文庫絵図892)

るように23列整然と並ぶ柱列、石竈、石切場など様々な遺構が確認され、10年目を迎えた昨年度は地元で「弾正屋敷跡」と言い伝えられてきた部分の調査を行い、掘立柱建物跡と井戸跡を確認し、屋敷跡と断定するまでには至らなかったが、何らかの生活域であったことは間違いなさそうである。11年目の今年度は、陣取図に描かれている「やぐら跡」と思われるものを確認するための調査を行い、可能性の高い遺構を検出した。このように、調査を継続することにより毎年新たな発見が続いており、今後が楽しみである。

ところで、前述した『迎春・和仁仕寄陣取図』とは、天正15(1587)年の国衆一揆の際に豊臣秀吉が差し向けた約1万の兵が田中城を取り囲んで兵糧攻めにしている様子を描いた絵図であり、その中には小早川秀包・安国寺恵瓊・鍋島・立花・筑紫など攻め手の武将の名や方角、田中城から陣までの距離などが詳しく描かれている。平成3年度からは、この陣取図を参考にして調査を行っているが、絵図と現地とを対比して調査を行った場所から、連棟式の兵舎跡ややぐら跡と思われる遺構が確認されるなど、この絵図の信憑性が高まってきた。今後は、攻め手側の陣跡などを調査することで、田中城がどのような形で攻められたのかが解明できればと思っている。

研究メモ

川田城跡 (鹿児島県日置郡郡山町川田)

有川 孝行

川田城跡は、郡山町と鹿児島市との境にあり、比志島上総介重賢（栄尊）を祖とする川田氏の本城で、別名を馬越城といった。

川田氏は始祖川田右衛門尉盛資から第11代川田駿河守義朗（島津義久の軍師）が天正2（1574）年に垂水地頭として転封になるまでの約300年間、川田城を拠点としていた。

城跡の遺構は、諏訪原と呼ばれる台地の南の先端にあり、曲線的に蛇行して掘られた空堀によって隣接台地との間を分断している。また、川田城の東側は川田川の深い溪谷を望み、南側は切り立った断崖で自然の要害を成している。

城内は南北及び東西に走る空堀によって大小五つの曲輪から構成されており、主郭が不明確で求心性の少ない典型的な南九州型プランの城郭である。各曲輪には一部に土塁も見受けられるが、主郭とされる場所には、ほぼ完全な形で土塁が残っている。また、『日本城郭大系巻18』や『郡山町郷土史』によると、楼閣の存在を思わせる礎石類が所々に散在していると記されているとおり、礎石状の約20cm大の石が確認できる。その他主要な曲輪には小曲輪が付随し、虎口や櫓台、枡形、横堀・縦堀、城道等も計画的に配置されている。規模や遺構の残存状況、纏まりの良さ等は近接する比志島氏の居城、比志島城跡を凌ぐ。さ



主郭部空堀

らには都之城跡や伊作城跡、櫛間城跡、額娃城跡、知覧城跡といった一連の中心的な城郭に匹敵するものである。

この城は、文明17(1485)年第7代飛騨守立昌の時、守護島津忠昌に叛いた島津修理亮忠兼が当城を二度も攻めたが、城の守りが堅くついに落とすことができなかったと『郡山町郷土史』に記されているとおり、川田城に立ってみると要害堅固を感じ取ることができる。

しかし、今日みることができる川田城の縄張が確立したのは、第11代駿河守義朗が軍学の知識を注いで大いに修築したと伝えられていることから、永禄期の1560代の頃ではなかったかと考えられる。ちなみに川田駿河守義朗は、島津貴久の臣であった伊集院大和守忠朗について兵術を学び、島津義久の軍師として活躍した人物である。

なお、発掘調査は実施されていないが、現在、南九州城郭談話会の協力で縄張調査を実施している段階である。

註

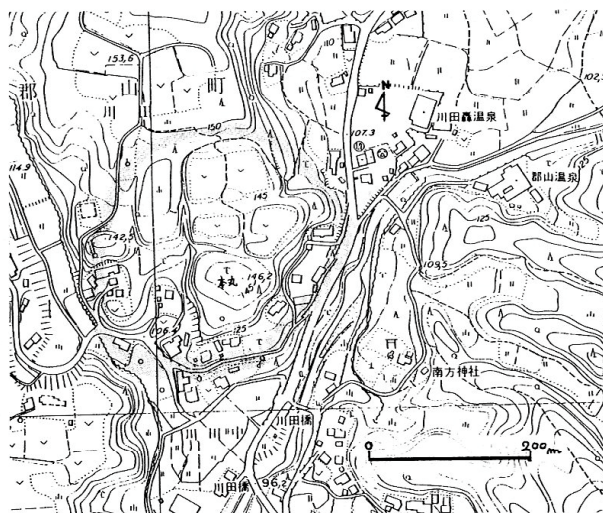
- (1) これについては、村田修三氏は辺境型、八巻孝夫氏は群郭式城郭、千田嘉博氏は南九州館屋敷型城郭と呼んでいる。

参考文献

三木 靖 1980「川田城」『日本城郭大系』巻18

新人物往来社

『郡山町郷土史』1971



川田城跡位置図

鹿児島県歴史資料センター黎明館に
志布志内城想定再現模型

三木 靖

大隅の戦国大名肝付兼亮は数年来競ってきた薩摩の戦国大名島津義久と天正2(1574)年初頭には牛根・垂水と禰寝で合戦を繰り返していた。肝付救援のため正月9日飢肥城を出陣した日向伊東勢は、串間城を経て11日から16日まで志布志内城に在城、17日串良経由、禰寝で禰寝勢と合戦、高城を攻略し志布志内城に戻り、23日から29日まで滞在、2月2日飢肥城帰陣(壱岐賀州年代記『旧記雑録後編巻7』所載)。

兼亮の父兼統は永禄7(1564)年当城を隠居城にし、伊集院竹友を志布志地頭にし、2年後当城で没しており、当城は肝付氏の領国統治の拠点となる城。前年末吉の国合原合戦で討たれた肝付勢105人中、志布志に住む者41人(竹友を含む)で断然多く(『北郷時久譜』『旧記雑録後編巻6』所載)、肝付勢の主力は当城内と麓に居住。それ故今回伊東勢は当城に長期滞在。禰寝攻めの肝付・伊地知勢は三千、牛根攻めの肝付・伊地知勢は肝付勢の一部が帰陣していても五千騎(『箕輪覚書』『旧記雑録後編巻7』所載)であり、耳川合戦前のこの時期の伊東勢は数千騎にはなっただと思われる。

その伊東勢が緊張しながら出陣した天正2(1574)年正月17日朝の当城を再現した模型が、鹿児島県歴史資料センター黎明館の新しいテーマ展示で中世の中核となる栄誉を担った。鹿児島の中世を山城で代表させた黎明館の展示は画期的で全国的にも注目されている。

鹿児島県指定史跡の志布志内城を史資料により百分の一に再現した模型は幅3.3m、長5.7m、高70cm(垂直面は平面の1.2倍)と巨大である。

内城は前川河口に接するシラス台地の先端で、北東側台地の本体とは空堀で切り離され、

前川側と沢目記川側は崖であり、南西側端は次第に低くなる。その前面の平地に館がある。城の東南から南にかけてと南西から北西にかけての周囲は麓で家臣屋敷(武士身分で耕作に従事)や祠が、川に船着場がある。以上と北東の台地境の空堀の周囲を含めた範囲が当城に続いており、当城主が統制した。放置されてから後四百年経つが意図的破壊が殆どなく、当城と近隣の松尾城・高城・新城と麓を含む周囲は中世的な景観を残している。

志布志は平安末期には救仁院という行政単位内で島津荘に属した。史料には正和5(1316)年「志布志津」が初見。島津荘の中心は都城で、志布志津は一番近い港で同荘成立以来同荘々務にかかわり、交通の要衝で重視された。「志布志城」は貞和4(1348)年の史料に初見、松尾城を指した。貞治4(1365)年頃から内城を指し、その後も内城を指す場合が多かったが、時には松尾城を、あるいは内城と松尾城を、また、内城・松尾城・高城・新城を指す場合もあるので今回は志布志内城と命名した。

志布志には平安末(1170)年頃から救仁院氏その後楡井氏がおり、南北朝期(1340年頃から)に初めて築城。貞治4(1365)年頃島津氏が当城に入り新納氏が受け継いだ。永禄5(1562)年肝付氏が、天正5(1577)年島津氏が領有した。何度も城主が交代し合戦があった(『鹿児島県史料』、『志布志町誌』)。

内城の範囲は(1)台地を横断する4つの空堀とこれに直角に交わり台地の端を貫通する長い2つの空堀で区切られた台地最上段にある曲輪と、2つの空堀の外側にあり最上段にある曲輪を防衛している長い土居からなる主要曲輪群と(2)土居の外側で平地より上にある副曲輪群とで(3)平地の館が付随。〔1〕曲輪は主要なものは6つで、曲輪1～3は台地に並行に、曲輪4～6は台地を縦断する方向に長く、曲輪1以外は2段で、広さは曲輪6、5、3の順、曲輪6が一番高い。形は全部しっかり



志布志内城模型（鹿児島県歴史資料センター黎明館）

している。〔2〕土塁は曲輪 2 ～ 6 の北側を主に曲輪の安全を確保，曲輪 3 の土塁は高く大きい。〔3〕櫓台は曲輪 1 の東側，曲輪 3 の北隅と曲輪 5 の北隅にあり曲輪 1 と 3 ののが大きい。〔4〕虎口は 2 以外は立派な坂虎口で，曲輪 3・4・5（2 か所）は枳形を完備。〔5〕空堀は曲輪の周囲を全面囲む。箱堀様で広大な所と狭い所がある。底は道になっていて絞り込んだ所がある。〔6〕土居は台地両側の空堀の外側に連続していて空堀と曲輪を外部と遮断するための障壁である。〔7〕東側の土居を含む外側には大小 8 つの曲輪があり主要曲輪群を擁護。西側の土居の北の部分は単純な土居。南西の部分は 6 つの曲輪で曲輪 1 ～ 3 を擁護。この付近には中央南北に伸びる空堀があり直角に 2 回折れて曲輪 3 へ通じる。

「志布志記」によれば長い空堀の南端が大手で城戸と枳形，曲輪 3，4 間の空堀の南東端が小淵口で城戸（搦手），曲輪 1 が矢倉場，曲輪 3 が本丸，曲輪 4・5 が中野久尾，曲輪

6 が大野久尾。留城戸と隠し井戸があり，館は島津氏久と新納氏の屋敷という。矢倉場に愛宕社，護麻堂。現在そこに新納氏の墓が，本丸に新納久顕を祀る三宝荒神祠がある。

主要な曲輪は曲輪 1，2，3 が一群，曲輪 4，5 が二群，曲輪 6 が三群で，まず一群の曲輪を台地最上段に作り，空堀と土居を設けたのが当城第一段階。合戦の激化に二群を造り，土居を伸ばし日常的には年貢収納場，合戦時に住民の避難所等となったのが第二段階。拡大のため土居の長さまで堀を拵え，台地本体と切り離し三群を付加したのが第三段階。

（「日向国志布志内城の縄張の研究」参照）。模型は三度の大変遷後の複雑多岐な様子で，広大な城域と枳形虎口は家臣の居住向き区域の拡大と大軍勢収容のための普請の影響。この頃曲輪 2，3 は城主向きで曲輪 2 は外交向き曲輪 3 は生活と政治向き，城主は曲輪 3 に居住，曲輪 4 は奥向き，曲輪 1 は直臣，曲輪 5 以下は家臣の居住向き，北東側では普請が

継続中。切岸は草木を薙いだが曲輪には300本の樹木、城域は木柵で囲まれ虎口は木戸、門は冠木門・高麗門、崖には逆茂木。

曲輪は成立時期を異にし、物見櫓や主殿、台所、客殿、鍛冶屋、家臣屋敷等木造平屋があり、日常的に使用。メインは主殿10間×5間、奥殿7間×4間で檜皮葺、会所5間×3間、鍛冶工房5間×3間、家臣屋敷7間×3間を最大に5間×2.5間が多く、木端葺・茅葺。櫓は井楼を主とし番所、武者棟、武器庫等と井戸があった。

本模型の時期は冬なので緑を押さえ見映えはもう一つだが、曲輪には150の建物施設、70の門と木戸、5,200m分の柵、そして乱杭・逆茂木・麓屋敷・船を配置し、千人を遥かに越える軍勢を収容する様子を示し、名称等の標示をした。志布志町と黎明館の協力により完成した。

第5回見学会・例会、総会案内

日時 平成9年2月11日(火)

集合場所 頤娃町町民会館(中央公民館)
(鹿児島県揖宿郡頤娃町)

交通案内
・JR指宿枕崎線西頤娃駅下車歩10分
・指宿スカイライン頤娃インター下車青戸経由頤娃町市街地へ

会 順 (1) 見学会
10:00 集合
10:30 頤娃城跡見学
12:00 昼食
(頤娃町町民会館)
※ 希望者は弁当を受付けます。

(2) 総会・例会
13:00 総会
13:30 研究発表
・頤娃城跡について
・各地の城郭城館調査
・質疑応答
15:30 解散

【新入会員】

(1月31日現在)

市村 高男 犬童 敏春 北川賢次郎
鮫島 泰蔵 谷口 俊博 徳留 盛行
三尾佐智子 山下 巖

お知らせ

第6回の見学会・例会は6月下旬
宮崎県都市で開催の予定

事務局からのお願い

- ・会員の皆様方におかれましては、ますます、御清栄のこととお喜び申し上げます。
- ・さて、2年目を迎えるにあたってのお願いを申し上げます。97年の年会費1,000円を納入していただきますようお願いいたします。

編集後記

◆早いもので、会が発足して1年が過ぎました。これも会員の皆様方のご協力、ご支援の賜物と感謝申し上げます。引き続き、宜しくお願い致します。

◆今号は、重永卓爾氏に投稿していただき、再び鹿児島県頤娃城について研究を深めることができたのをはじめ、多数の方々から力作の原稿を頂き感謝申し上げます。折角執筆いただきながら、紙数の都合上、一部は、次号に掲載させていただきますので宜しくご了承賜りますよう、お詫びとお願いを申し上げます。

◆今回は、「尚古集成館所蔵鶴丸城古写真」、「櫓台1997年の動向」、「キーワード」はお休みいたします。

◆次号の会報発行は、6月中旬の予定です。
(Shige)

南九州の城郭 第4号

発行所 鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
ミュージアム知覧内 上田耕 気付
南九州城郭談話会
(振替口座 02040-6-37850)
発行者 三 木 靖
印刷所 (株) ト ラ イ 社
入会金500円 年会費1,000円